

ダイズ紫斑病（原因菌：*Cercospora kikuchii*）

1 病徴

葉、莖、莢、子実に病徴が現れる。子葉や胚軸では赤褐色雲紋状の斑点、葉では中肋や支脈に沿って紫褐色の小斑点、莖や葉柄では紡錘形に近い病斑が生じるとされている。しかし、本県では葉や莖での病徴はほとんど認められていない。莢では、最初に円形または不正形で直径 2mm 程度の紫褐色～紫黒色の斑点が生じ、莢が黄化する頃から拡大する。子実では、へそを中心に紫色の斑紋が生じ（写真）、品質を低下させる。



写真 紫斑病罹病粒

2 発生生態

原因菌である *Cercospora kikuchii* が種子や罹病葉上で越冬する。翌春ダイズの発芽とともに子葉を侵し、子葉の病斑上には多数の分生胞子が形成され、これが第二次伝染源となる。子葉は落葉しても長期間伝染能を持つ。分生胞子は無色の長い鞭状(38～450×1.3～6.0 μm)で、多数の隔膜を持つ。発芽期～第1複葉期の感染・発病が多く、夏季には一時収まるが、9月になると下位葉に再び病斑が現れ、さらに子実へと伝染する。寄主はほかにインゲン、アズキ、野生ダイズ（ツルマメ）があり、相互に伝染源となる。

本県の場合、種子更新率は40%前後と高くないが、被害粒率は近年1%未満であり、比較的発生は少なく推移している。

莢から子実への感染は成熟期の10日前頃から始まるため、収穫前10日間の気温が15～24℃と低温に経過し、降雨が続いた場合は発病が助長される。また、収穫が遅延したり収穫後高水分で放置したりすると被害が増大する。

本病の発生には品種間差があり、本県の主力品種であるタチナガハの抵抗性は「強」、あやこがねは「中」、里のほほえみは「強」である。

3 防除方法

多湿土壌で多発するため、ほ場の排水対策を行う。

自家採種する場合は、種子を精選し、紫斑病罹病粒を除去する。

薬剤による防除は、開花後20～40日に1～2回行う。その際は、莢に薬剤がよく付着するように散布する。

収穫が遅れると発生が多くなるため、適期収穫を行う。また、収穫後に高水分のまま放置すると被害が増大するため、収穫後はすみやかに乾燥・調製を行う。